魔法少女リリカルなのはStrikerS～二次創作～

4m

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～二次創作～

【Ｎコード】
Ｎ９０９６Ｙ

【作者名】
４ｍ

【あらすじ】
二次創作です

苦手な方はご注意ください

オリジナルの主人公が、訳の分からない世界に来てしまい、戻ろう
とあたふたする作品です

なぜ？知らないところへ

「でさー、こいつがさー」

「はいはいわかったわかった」

いつもと同じ毎日

いつもと同じように学校に行くと、休み時間は大体こいつはこの話だ

「いやさー？ＣＤ買おうか迷ってんだよね」

「・・・買えばいいんじゃね？」

いつも半分呆れたように俺は答える

最近こいつは気になっているＣＤを買おうかどうか迷ってるらしい

その理由が・・・

「だってさー、タイトルに少女って入ると変な目で見られそうでさ」

「好きならいいじゃん、買っちまえよー」

こいつ曰く、登場キャラは皆大人だけどタイトルに少女がつくから決心が・・・だそうだ

「んじゃ、チャイム鳴るからもう行くわ」

そう言って自分の席にもどろうとすると呼び止められた

「これお前にやるよ」

そう言って差し出してきたのは『ストライカーズ』と書かれた単行本だった

「今出すなよバカ！」

そう、ここは学校

ということは他にも生徒がいるわけで、幸いにもバレなかったが危ないところだった

なぜ？知らないところへ（前書き）

投稿のしかたを少し間違ってしまいました

なぜ？知らないところへ

「んじゃ、チャイム鳴るからもう行くわ」

「あ、ちょっと待った」

自分の席に戻ろうと歩き出そうとしたときにふと呼び止められた

「これ、やるよ」

目を戻した時に飛び込んできたのはサブタイトルが『ストライカーズ』と書かれたこいつの本だった

しかもまだ未開封、新品同様だ

「ちょ！お前何やってんの！？」

そう、ここは学校

ということは他の生徒もいるわけだが幸いにも俺が素早く取り服の下に隠したため騒がれずにすんだ

「まったくお前は・・・」

「悪い悪い、それさ特典目当てに二冊買ったから一つお前にやるよ」

「そういうことね・・・」

まったく、ヒヤヒヤさせるぜ・・・

そうして俺は、服の下に本を隠しつつ自分の席に戻ることとなった

～家～

「ただいまー・・・つっても誰もいないか」

俺は一人暮らし

最初は戸惑ったけど慣れればもう住めば都、いろいろと便利なものである

居間の扉を開け中に入る

「よっこらしょっと・・・」

俺は部屋の中央に配置してあるソファーへと腰をおろす

「進路ねぇ・・・」

目の前のミニテーブルには、いろいろな大学や専門学校から送られてくる資料やパンフレット

俺ももう高校三年生

なのにまだ進路ははっきりしていない

決められないのだ

「まったく・・・」

そう言いつつも俺はカバンを漁った

すると

「・・・ん？」

何やら、教科書よりも小さな本を見つけた

「ああ、あいつのか・・・」

それは今日あいつから貰った単行本

教科書に挟まれていたとはいえ、ビニールが剥がれるといったことはなかった

「ふーん・・・」

俺はビニールを開け中をペラペラとめくった

「なるほどなるほど、魔法ね」

どうやら内容は魔法使いもののようだ

最後までページをめくると

「うん？」

何やら小さな紙が落ちてきた

「なんだこれ？」

見てみると大きさは飛行機のチケットくらい

色は珍しく金色で、動かしてみるとキラキラ輝いている

「なるほど、ファンアイテムってやつか？」

それなら納得がいく

だけど俺は、あいつのおかげで内容はところどころ知ってはいるがファンという程でもない

それなら宝の持ち腐れだ

「・・・捨てとくか」

でもこの本はもう俺のもの、もしかしたらよく単行本に入っているあの紙のようなものなのかもしれない

俺は居間の扉のすぐ下にあるゴミ箱へそのチケットのようなものを丸めて投げた

扉に跳ね返りゴミ箱に入ると思ったが床に落ちてしまった

「まったく・・・」

この手の方法は取りにいくのが面倒である

何回やっても上手くいかない

何かコツがあるんだろうか？

「ん？」

しぶしぶチケットを拾いゴミ箱に捨てようとしたら、扉の向こうからなにやら光が漏れているのが見えた

電気なんかつけただろうか？

俺はチケットを手に、光の正体を確認するため扉を開け廊下に出た

そして

落ちた

どこだ？見知らぬ街へ（前書き）

ごめんなさい

内容はうろ覚えなので間違うことがあるかと思います

どこだ？見知らぬ街へ

～？？？～

「痛い・・・いってー！」

木箱を破壊し、木箱の周りにある小物も派手に飛び散らしながら俺は荒々しく着地した

いや、落ちてきたと言ったほうが正しいだろう

「いってー・・・こ・・・こどこだよ」

そこは薄暗い、どこかの街の裏路地だった

人の気配がまったくしない

物が散乱しているだけだ

「と・・・とりあえずどこかに連絡を・・・」

俺はジーパンのポケットに手を入れ携帯を取り出した

ん？まて・・・ジーパン？

俺は学生服で学校に行ったはずだ

帰ってからも着替えていない

なのになぜ？

よく見ると上着も違うようだ

ここだと暗くてよく見えない

「くそ、明かりはどこだ・・・？」

周りを見渡してみても照らすようなものはない

不幸なことに俺の携帯にはライト機能がない、待ち受けの明かりでは少々無理がある

それに圏外ときたもんだ

「・・・たく、どうしろってんだよ・・・」

まだ何かないか辺りを見回すと

「あれは・・・いって・・・大通り？」

痛む体を無理やり起こしその方向に目をやると、昼間なのだろうか見た感じ大きな路地からは街灯とは思えない明かりが感じられた

「とりあえず・・・行ってみるしかない・・・」

行動しなければ何も変わらない、そう自分に言い聞かせ俺は歩き出した

「ほんとに何処なんだ？ここ・・・」

俺が暮らしてた街とはまるで違う、見たこともないところだった

それに俺の格好

下はジーパン、上は裏地が赤で表が黒のコート

インナーに白いシャツを着ている

「なんだよ、なんなんだ！」

気がつけば俺は走りだしていた。すべてが夢だと信じたい、そんな思いで走っていた

だけどこうなってしまった以上仕方ない

「そうだよ・・・まずは情報だ」

何事にも情報は不可欠だ

それに走ったおかげで通りにある本屋を見つけることができた

これはもう入って調べるしかない

～本屋～

「まったく読めねぇ・・・」

入って俺は雑誌コーナーにいった

下手に新聞を読むより、雑誌のほうがわかりやすい

これが俺の考えだ

この世界でもそれは共通だと思い雑誌コーナーに足を向けた

そして金髪美女が表紙の雑誌を手に取りペラペラページをめくった

まではよかった

よかった・・・のだが

まったく読めないのだ

英語に似ている・・・だが読めないのだ

というかこんな文字の羅列は見たことがない

「どうしたもんかなぁ・・・」

半分呆れたように腰に手をあてた

すると

「・・・ん？」

何やら・・・カチカチと鉄を触っているかのような感覚があった

なんだなんだとそれをホルスターのようなものから取り出してみた

「な・・・！」

俺は叫びそうになったがここは本屋。一般の人もいるわけだ。下手に叫べば注目を集めてしまう。それに今注目されたら大変なことになる

なんで俺は銃なんか持ってんだ？

それも黒塗りのハンドガン

こんな物騒なものを普段から持ち歩くことはない

落ちてきたことと何か関係が・・・？

「ひ・・・！」

ふと、隣から女の人の声が聞こえた

雑誌を持ったままびくびく震え、その目は俺が持っているハンドガンに向けられている

「ええと・・・これはその・・・」

だが、弁解してももう遅かった

「キャァァァー！！」

耳をつらぬくような悲鳴

俺はハンドガンをホルスターにしまい雑誌を戻すと一目散に本屋をあとにした

弁解せず逃げなければ確実に警察に捕まってしまっていただろう

～どこかの公園～

「はぁ・・・はぁ・・・」

一目散に逃げた結果俺はある公園にたどり着いた

息を整えるためベンチに座る

「もう・・・いったい・・・なんなんだ・・・」

心身共に疲れはて、俺は泣きそうになっていた

変なところに飛ばされるは、服装は変わってるわ、文字は読めないわ、ハンドガンはあるわ、叫べばれるわ・・・もう疲れてしまった

「はぁ・・・どうしよう・・・」

頭に手を当て悩んでいると

いきなり周りが歪んだ気がした

「今度は何だよ!!」

俺はもう切れる寸前だった。それに加えて変な歪み。もう何が合っても驚かない

「なんだよ・・・これ・・・」

前言撤回、驚くようなことが起きた

歪みが収まったと思ったら辺りの風景が気持ち悪いものに変化した

普通の公園が、原型がないまでに

地面の色は赤茶け、公園に生えている木からは赤黒い液体が流れている

「う・・・」

思わず吐き気がした

そりゃそうだ、こんな気持ち悪いもの見たことがない

「グワァァァァ！！」

そんな俺の前に獣のような声をした化けものが生えてきた

そう・・・生えてきたのだ地面から

しかも・・・五体

人形だが足は機械、全身白に赤い線といった鎧のようなもので包まれており、右腕部分にはバカでかい中華包丁のようなものが生えている

俺は本能的に感じとった

もうダメだ・・・と

その中の一体が俺に飛びかかってきた

おそらく一体を突撃させ俺の出方をみるのだろう

もう終わりだ・・・

目を閉じる気力すらない

死ぬ・・・と思ったその時、俺の両手が自然に腰にあるホルスターに回されハンドガンを手に取り相手に向けた

それも・・・二丁

片方は先ほどの黒塗りのハンドガン、もう片方は左のホルスターにあった白塗りのハンドガンだった

さっきは右手を腰に回したため左のには気づかなかったのだ

そして銃を構えると、マシンガン顔負けの連射力でその一体を蜂の巣にした

もうそれは動かない

「え・・・？え？」

俺もわけがわからない

なんでこんなことができる？

すると今度は残り四体が一斉にかかってきた

これには俺も手を顔の前でクロスさせ衝撃に備えた

だが次の瞬間俺は銃を素早くホルスターに戻すと、手に剣を出現させ向かってきた四体に横殴りするように切り抜いた

四体はまとめてぶっ飛び地面に打ち付けられた

「なんだ・・・？」

どこからか出現した銀色の剣。日本刀ではなく両刃タイプだった

これを振り抜いたわけだ

「これ・・・どこかで見たような・・・」

必死に考えようとするが今はそれどころではない

四体は起き上がりまた一斉にかかってきた

今度はタイミングをずらし一体が前に、三体がその後ろから襲いかかってきた

「うわ！」

今度こそ終わった・・・そう思ったのだが

頭に浮かんでくる様々な戦術

ここはこう切ればいい、次にハンドガンで撃ち、剣に持ちかえ吹き飛ばすというようなものが沢山浮かんできた

「う・・・うおー！」

俺はまず向かってくる一体を剣ではるか上空に切り上げ、後ろからくる三体を剣が鎌に変化したので横殴りに切り裂いた

次に、切り上げた一体が落ちてきたのでまた二丁拳銃を取り出し蜂の巣にした

落ちてくる一体の残骸

三体も真っ二つにされ動かない

新たにこいつらがでてくることもないようだ

でも、次に問題なのはこの空間

どうやって元に戻すのだろう

「ん？」

空を見てみると、何やらコウモリのようなものがパタパタと飛んでいた

すると、またも自然に手が動きそのコウモリを銃で撃ち抜いた

撃ち抜いた瞬間周りの空間が歪み、元の公園に戻った

「何なんだよくそ！何なんだ！」

違う世界、歪む空間、戦術、服装、襲いかかってきた敵

考えるだけで頭がパンクしそうだった

「うう・・・う・・・・」

いつの間にか俺はしゃがみこんでいた

目の前が・・・チカチカ・・・

「ちょっと君!?大丈夫!?しっかりして!」

どこからか声が聞こえる・・・

ゆっくり顔を上げると俺と同じくらいの女性が駆け寄ってきていた

だがそこまでしか覚えていない

俺の意識は、そこで途絶えた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9096y/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜二次創作〜

2011年11月27日11時53分発行